



「かつら」の開所式

総合福祉センターが六月二十九日にオープンしました。センターは、老人福祉をはじめ身体障害者福祉や心身障害児・者福祉など、さまざまなニーズにこたえ、福祉関連団体のネットワーク化を図る拠点施設です。

市内外の関心も高く、七月一日から三日間、施設公開を行ったところ市民約三百人が見学に訪れたほか、現在も市民、各種

総合福祉センターの開設について

ります。これまでの成果をもとに、需要の確保、空港の周辺開発に全力を挙げ、一日も早い開港に向けて努力してまいります。

今後とも地域一丸となった熱意あふれる運動を続けていきますので、なお一層のご協力をお願いいたします。

団体や行政機関の視察が相次いでいます。

また、八月二十四日には、同センターの新規事業として、「デイサービスセンターかつら」を開設しました。寝たきりや体が弱く日常生活を営むのに支障のある人をバスで送迎、昼食や入浴サービスを行うものです。現在三十七人が利用登録しており、今後も利用者の増加が見込まれています。

ふるさと21健康長寿のまちづくり事業について

全国的に高齢化が進んでいます。秋田県は特に人口の減少と高齢者人口の増加が顕著です。厚生省人口問題研究所の推計によると平成十二年には全国一の高齢化県になるという予想も出ています。本市の場合も若者の県外流出や核家族化が進行し、一人暮らしやお年寄り夫婦世帯が急速に増えています。また、これまで在宅介護の中心的な役割を果たしてきた女性が働きに出るなど積極的に外へ出るようになり、在宅福祉の充実を求める声が高まっています。

このため、市では国の内示を受けて「ふるさと21健康長寿のまちづくり事業」をスタートさせました。この事業は、市民が健康で生きがいをもって安心して暮らせるまちづくりを目指すものです。



活性化を目指す大町

暮らせるまちづくりを目指すものです。去る八月二十五日には、基本計画づくりのため、基本計画策定委員会委員に二十人、懇談会委員に十五人を委嘱し一回目の合同会議を開きました。

本市ではこの十年間に総人口は四千三百四十七人減っていますが、高齢者人口は三千七百五十人増えています。また、お年寄りの八〇・九〇％が、余暇を楽しむ、働けるうちは働きたいという希望をもっています。

お年寄りだけでなく、市民が生涯を通じて健康で生きがいをもち安心して暮らせるまちをつくっていききたいと考えています。

大館市にぎわい交流拠点整備計画作成委員会について

大館市にぎわい交流拠点整備計画作成委員会は、八月二十六

日に初会合を開きました。メンバーは清水秋田大学教授を委員長に二十人です。

建設省は今年、市街地空間総合整備事業を新たにスタートさせました。この事業は、まちづくりの機運の高まりがみられる中心市街地に、人々の交流拠点となる公共的な施設を整備していくものです。

委員会は、この計画を作成する目的で設置したものです。総合的なまちづくりの方針を立案するとともにJR大館駅前、御成町南、大町の三地区の整備計画づくりを進めていきます。

樹海ライン活用

懇談会について

県道大館十和田湖線(通称・樹海ライン)の有効な活用策を探るため、JRやバス会社、関係自治体で構成する「樹海ライン活用懇談会」が設立されました。

樹海ラインは、十和田湖観光の中心的アクセス道路としてクローズアップされています。

懇談会では、樹海ラインにおける観光施設の整備や公共交通による観光流動の在り方などについて話し合い、関係機関への提言を行っていきます。最終的には十和田湖・大館・大館能代空港ルートと男鹿を結ぶ県北横断観光ルートの確立を目指します。

懇談会の結論に基づき、できるものから早急に取り組んでいきたいと考えています。

大館短期大学(仮称)

誘致の経過について

大館短期大学(仮称)誘致については、入学定員五十人の第一看護学科(三年課程)、三十人の第二看護学科(二年課程)、五十人の介護福祉学科(同)、百人の社会科学系学科(同)の学科構成などについて大学、県、市の三者で協議しています。大学側の「開校する」という基本的な考えは変わっていませんが、決定までにはもう少し時間がかかる模様です。

その他の行政報告

- ▽市指定ごみ袋による分別収集の試行状況について
- ▽「ゆとり創造宣言都市」の指定について
- ▽大文字まつりについて
- ▽水稲の作況について
- ▽大館小坂間高規格幹線道路整備促進期成同盟会の設立について
- ▽人間ドックの開設について
- ▽公共事業の発注及び進捗よく状況について